

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23221002	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	完新世における東アジア水循環変動とグローバルモンスーン	研究代表者 (所属・職) (平成29年3月現在)	多田 隆治（東京大学・大学院理学系研究科・教授）

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる	
○	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、揚子江、東シナ海、水月湖（と日本海）の3つの地域を調査対象とした各サブプログラムからなる。このうち平成23年7～8月に行われた水月湖の堆積物の解析は成果につながる可能性が高く、過去の偏西風ジェット的位置の動きを把握できることは評価できる。また東シナ海におけるコア分析などでも、新たな定量的評価の手法を開発するなどの成果が認められる。</p> <p>一方で、揚子江のサブプログラムでは、河口付近の掘削が遅れ、また洞庭湖の掘削では大規模な採砂作業による環境劣化があることから、計画を揚子江河口での掘削に変更するとしており、当初の計画に比べて遅れが生じていることは否めない。また国際的な学術成果の発信についても一層の努力が必要である。</p>		

【平成29年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>本研究の目的は東アジアの複数地点において堆積物コアを採取し、過去6000年間の水循環の時空間変動と、地球規模の変動との関係を明らかにすることである。本研究では揚子江、東シナ海、水月湖における試料採取に成功し、各地点における水循環変動を明らかにした。さらに、各地点の成果を時空間で統合することにより、偏西風軸と東アジア夏季モンスーン降水フロントの数百～数千年スケールの連動等の成果を得るとともに、その変動をグローバルな枠組みで解釈した。試料採取における現地の不確実な状況にも適切に対応しており、当初計画に対して概ね期待どおりの成果があったと評価できる。今後の論文発表によって研究成果の社会へのより一層の周知を期待する。</p>